

阿坂卯一郎・榊原政常
柴田北彦・内木文英 編

未来一幕劇シリーズ14

高校演劇一幕劇集

〔第四集〕

未来社刊

阿坂・榊原・柴田・内木編

高校演劇一幕劇集

【第4集】

未来一幕劇シリーズ 14 未来社刊

本書に収録した作品の無断上演を禁じます
上演の際はかならず未来社にご連絡下さい

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

高校演劇一幕劇集 第四集

【未来一幕劇シリーズ 14】

一九五九年二月一五日 第一刷発行
一九七九年八月三一日 第六刷発行

定価 七五〇円

編者代表 内 木 文 英

発行者 西 谷 能 雄

発行所 株式会社 未 来 社

東京都文京区小石川三―七―二
振替・東京 七―八七三八五番
電話代表 〇三(八四)五五二―番

本文印刷 萩原印刷

装本印刷 廣 陵

製 本 五十嵐製本

(落丁・乱丁本はおとりかえします)

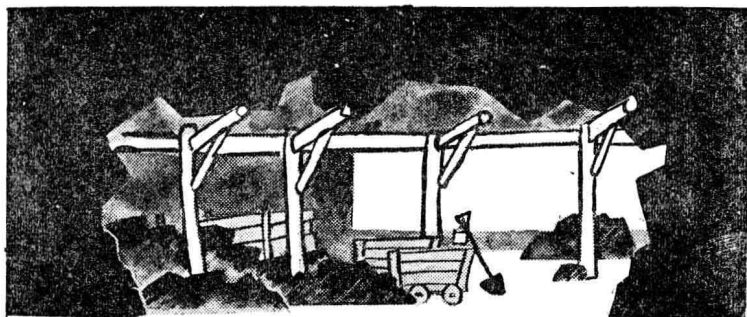
高校演劇一幕劇集 第四集 目次

カンテラ……………	井上真治……………三
向い風……………	岡野奈保美……………三
開幕三十分前……………	小幡欣治……………三
ガシマル樹の蔭にて(二幕)……………	風見鶏介……………七
夜風……………	阿坂卯一郎……………三
解説……………	内木文英……………三

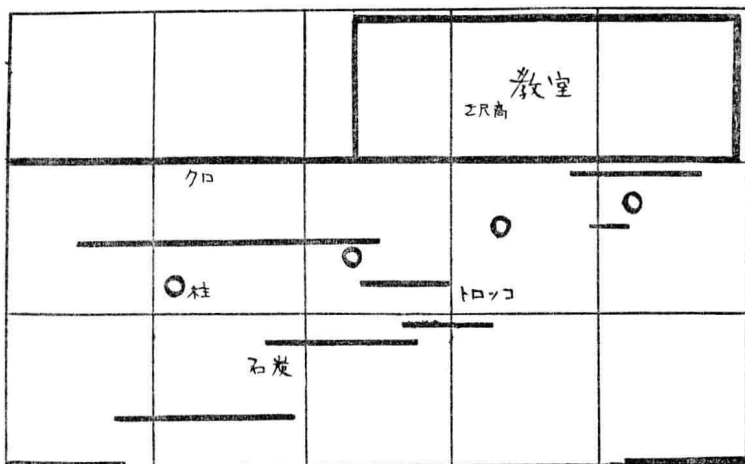
装置図 金子国義

カ
ン
テ
ラ

井
上
真
治



10



キ ャ ス ト

竹本正夫(高校三年中退)

大 坪(高校三年生)

岡 田 ()

石 田 ()

川 崎 ()

中 村 ()

藤 井 ()

永 野 ()

警 官 1・2

或る炭田地帯の盜掘坑の一つ。

上手は坑道の断面。大小不揃いの坑木が粗く並び、二、三枚の板が横に通り、岩盤の崩れを防ぐ。二寸角の木で造ったレールは舞台中央を通り、下手に石炭を積んだ炭車が二台並ぶ。炭車とは名ばかり、枠は有合せの材で造られ、車輪は直径三十センチ位の丸太を輪切にして軸を通したものの。中央寄りの炭車の端に突立てたスコップの把手から古ぼけたカンテラがぶら下る。

カンテラの下、炭車に一本のツルハシが立掛けてある。炭車の陰に僅かの石炭が積まれ、箆二、三個散らばる。

背後には一面に黒色の網が垂れ、奥との空間を遮断する。舞台奥は一段高く、教室の内部。下手に黒板、その下に教壇の一部分。上手へ戸口からガラス窓。机、椅子が若干並ぶ。

幕あく——上手、外界からの薄明りが地下水に濡れた坑道に鈍い明暗をつける。下手カンテラの周囲だけ明るく、炭車に寄りかかって眠りこける竹本を照らす。他は暗黒、間隔を置いた水の滴りが尾を引いて反響する。静寂な或る時間を刻んだ後、クロス・フェイドしてクラリネット低音部の緩やかなメロディ。教室の右端、窓際の椅子に腰掛け練習する偏癡の大坪に照明入る。間。

大坪

(ふっと止め、宙を見つめる)……如何なる星の下に生れけむ、我は世にも心弱きものなるかな。

竹本の頭、がっくり揺れる。

竹本

(力なく起し)え?……何だって?……俺、眠いんじゃないかよ……何か聞えたっけが……(眠

りに入る眩き)うるせいなあ。

大坪、再びクラリネットの練習。メロディにクロス・フェイドして水の滴り。大坪、消える。

竹 本 (不明瞭な独言)

短い間。

舞台奥、暗黒よりの声「おい……へへへ、おい……」

水の滴り消える。

舞台奥戸口の近く、机に腰掛け、椅子の上で足を組む岡田に照明入る。

岡 田 おい、受取ってくれよ……へえ——(前の机に置いた紙片を指さし)じゃ、この質札、細かに破いて、窓から撒散らしても文句ねえってんだな……お前の腕時計、パーだぜ。

竹 本 ……(欠伸)ああ、また起すのか……やり切れねえよ……俺、睡眠不足だって何辺云や判るんだ……眠いやあ。

岡 田 ねえ、判って下さいよ。俺、大層感謝してるんだぜ。……へッへッ、深刻な面することねえだらう？

竹 本 何も考えたかあねえんだよ……身体中だるくてだるくて、地面にめり込みそうなんだ……この洞穴の湿気にすっかりやられちゃったよ。(鈍い動作で首筋に手を当てる)ああ、雫が冷てえ。蛞蝓が這ってるとさ……ぞっとすらあ。

岡田 おい、一体、俺にどうして貰いてえんだ？

竹本 同情なんかまっぴら御免蒙りてえよ。……親父の稼ぎでお袋から暖かえものを喰わして貰ってるお前らとは育ちが違うんだ。孤独のやり場のなさを腹一杯お前らに叩きつけてやりてえや……グウの音も出ねえだろう。エヘヘ。（力の抜けた笑い）

岡田 （ハッと立上る。恐怖の表情）来やがった。三人だ。（消える）

竹本 度胸がないじゃ、俺らの仕事勤まりゃしねえよ。俺らはね、真剣さの中味がはなっから違ってるんだ。警察が躍起になって俺らを嗅ぎ廻ってるからなあ。（生欠伸するとはだけた胸をかき合せ身体を起こす）自棄に冷込むなあ。畜生、寝そびれちまうじゃねえか。……俺らの仲間？……俺加えて五人だよ。月に四十トン位は稼ぐんだぜ。俺らみてえな人種は、この炭坑地帯で五、六百人位巢喰ってるらしいや。インチキ会社のハーモニカ長屋で喰いつめた奴らが狸掘りに入って来てよ、警察から現場荒されて元も子も無くなりゃ、散り散りになった行先でまた仲間が出来る。採炭夫と名の付きゃ、例え天道様に見離されても飯にゃ事欠かねえんだってさ。……俺？……（ニヤッと笑い）学校でサッカーやってたろう？ だもんで、筋は悪かねえ、しっかりやってくんなくて褒めてくれたよ。今、先ヤマやらされてる。どうしても新米なもんで、分前は太したことねえ。だけど、ちょいとお眼にかけようか。（ポケットトから外国煙草を取出す）洋モクだぜ、へへへ。おっと勿体ねえ、その手は引込めな。（ポケットにしまい、ゆっくり坑内を見廻す）……俺らこの穴にかかってから、もう大分深くに入っちゃったなあ。炭層は二十センチ位、二、八〇〇カロリーそこそこのケチな山だ。（下手を見つめる）この先、どこ迄行きゃ突当るんだ。畜生、掘って掘って掘りまくってやるぞ……俺はお前らを一辺ここに引張り込んで、思切りこの地面を這わしてやりてえよ。お前らの住んでるその生暖い地面たあわけが違うんだ。（上手を指さす）何時くしゃっと崩れるかも知れねえんだぞ。その時、誰が助けてくれると思う……え？ た

った四人の仲間が？……ハハハ。

舞台裏より鋭い呼子笛。

竹本 来たっ。

竹本、素早く下手側炭車の陰に消える。教室内の照明入る。誰もいない。舞台裏より声、手拍子、呼子笛。

声 三百三十七号！ そうら。

群集の手拍子、二度繰返す。それに交る笛。

声 フレーフレー、白組イ。

群集の声 フレツフレツ、白組イ。

フレツ、フレツ白組イ。

声 続いて——白組応援歌——三、ハイッ。

群集の声 金比羅さんの神主が——おみくじ引いて申すには——何時も白組、勝、勝、勝、勝、勝イ。（メロディは花咲爺）

声 乱打！ そうら。

群集の手拍子、笑声、次第に遠のく。竹本、舞台裏の群集場面の間に旋車の陰から姿を現わし、ノロノロと舞台中央に向つて歩く。

竹本

（眼が輝く）見える……はっきり見える……（立止り、舞台前方を見つめる）あの教室だ。懐かしいなあ……俺、今迄に随分努力してみたんだが、どうしても思い出せなかった。そして何時の間にかそんな努力が馬鹿馬鹿しいことのように思えて諦め始めた。その癖、淋しさったらなかったなあ……（順々に眼を移す）黒板、教壇、戸口、ガラス窓……薄汚い壁の色……教室の匂い……俺ちつとも忘れてないぞ。……（指さす）ああ、黒板の隅っこにピンで止めてある葉書、俺が出した奴じゃないか……あれ、一昨日だったなあ。このカンテラの下で書いたんだ。無性に眠い晚だったよ……みんなに読んで貰おうなんて及びもつかねえけど、ただ自分の気持ちをしまっておけなかったんだ……みんなの顔見てえよ。あの窓際、一番目にクラス委員の宮本。その後が気の弱い森田、軟派の守屋、ノッポの山内……

大坪、クラリネットを持ち入ってくる。ゆっくり歩き、元の場所に腰掛ける。

竹本

僵木のクラリネットだ。……大坪の奴、青白くて……今にも背中が真二つに折れて、もう永久に歩けなくなるような錯覚を起すなあ……相変らずしょんぼりしてやがる。体育祭の頃になると、誰からも問題にされなくなって彼奴の憐れさが急に目立つんだ……おい大坪、吹けよ。

クラリネット低音部のメロディ。

竹本ゆっくり歩き、カンテラの下に坐る。間。

大坪 (ふつと止め宙を見つめる。以下そのポーズは動かない) 如何なる星の下に生まれけむ、我は世にも心弱きものなるかな。

竹本 大坪……お前の独言、久し振りに聞くよ。俺のいなくなった後ずっとやってたんだ……隅の壁にへばりついてブツブツやり出すと、無神経な俺らは待ってたように茶利を入れたよなあ。

大坪本 ……(同時に) 我泣き濡れて伛僂蟹とたわむる。

竹本 ……すると、お前はまるで自分が悪いことでもしたように、教室からこっそり出て行つたわけ……お前の行く場所はちゃんと決つてる。

大坪 中庭の木犀の陰。今時分、辺り一面凄く甘酸っぱい匂いが漂つてるよ。

竹本 おい、大坪……あの文句を考え出したのは、実は俺なんだよ。

大坪 ずっと先から知ってたんだよ。

竹本 だからよ、俺つてどうしてこうも低能なんだろう。思いやりもねえで、恨んだらうな。

大坪 ……僕のような人間、誰の邪魔にもならないことが一等いいんだ。眉をしかめてまで同情しなきゃならなくなるか、横を向いて向うに行つてしまいたくなるか、僕の横をすり抜ける一日何十人かがある僕に無関心でいるわけにはいなくなってしまう。そんな重苦しい気持、誰だって厭だろう？……僕、小さい頃から人の顔色を読むのがとてもうまいんだよ。その醜さからどうしても逃げられない……ノートルダムの鐘つき男は泥棒猫のようにすばしくて汚かった。僕はあんなになりたくない。

竹本 よくそんなこと云つてたつて。俺覚えてる。お前の罪でもねえのに、ひでえよなあ。

大坪 (葉書の方に振向き) 君だつて、きつと不幸なんだね。

竹本 俺が？ 冗、冗談じゃねえ。お前に比べりゃ物の数でもねえよ……。だけど……

大坪 僕は急にそんな気になり出した。住所も書いてないじゃないか。

竹本 ヘッ、こんな洞穴に地名や番地があつてたまるかよ。

大坪 ここからずっと遠い所なんだね？

竹本 (ニヤッと笑う) たった五、六里しか離れてねえんだよ……汽車で二つ目の香月の町を出抜けて、

平山鉱業所のボタ山に沿って西に一里行くんだ。バス停留所から左に折れて田圃道をダラダラ上ると低い松山に突当る。墓場の所でオート三輪はストップさ。山裾に沿って百メートルも歩くと深い谷あいの奥まった所にこの洞穴の口は開けてあるんだ。

大坪 君の葉書、黒く汚れて、よく読めないよ。

竹本 ああ、そうかあ……(両手を眺める) 気がつかなかった。

大坪 君はきつと不幸なんだね。

竹本 ………

大坪、クラリネットを取上げて吹く。

間。

石田、川崎、中村、藤井、永野、ドヤドヤ入つて来る。ワイシャツ、黒ズボンの上に袴をつけた者、レイを首に掛けた者、日の丸扇を持った者、一本歯の高下駄を手にぶら下げた者、応援歌を唱う者、騒然たる空気が渦巻く。

大坪吹奏を止めると、ハンケチを出してひっそりと拭き続ける。

永野 どうも順序間違えちゃうんだ。こうだろう？ チャッチャッチャッ……

藤井 馬ッ鹿野郎、初め右廻りじゃねえか。（一同笑う）

川崎 おい永野、明日からの合同練習、まごまごやつてたらリーダーの恥だぞ。

永野 （頭をひねる）一週間もリーダー練習やった結果がこうなら俺も一寸考えるよ。

藤井 余っ程無器用に出来たんだな。

永野 らしいなあ。

石田 頼りねえ男だ。（一同笑う）

永野 笑うなよ。藤井、俺いつもお前の後にいるよ。

藤井 ああ、いいよ。

永野、藤井を相手に暫く復習。

川崎 明日から裏門を張番してないといけないな。練習嫌って帰る奴が相当いるぞ。石田、授業が終わったら四、五人で固めてくれ。

石田 OK。

中村 俺らだって一年の頃は上級生の剣幕に吞まれて一時間以上も芝生で辛抱したな。

石田 云うな、云うな。毎年の慣例なんだから、自分らが三年になったら大いにやればいい。

川崎 中村、張子のダルマ出来上ったのか？

中村 上々のコン吉だ。明日学校に担ぎ込むよ。二階の縁側に干しといたらさ、鼠にやられて見るも無残な恰好だ。お陰で二日も徹夜に及ぶという涙ぐましい努力を重ねたんだぜ。

藤井 それが生れて初めての徹夜かい？

中村 勿論。俺って人間は元来仕合せに出来てるよ。（一同笑う）

石田 俺ら、こんなに張切ってるのに、学校側でんでなっちゃねえよ。応援団費は六十円に制限する、応援歌は学校で許可したものを使用するって、何て言い草だい。どだい、爆竹を一つ一つ勘定しながら打上げるなんてケチ臭い真似が出来るかっぺんだ。

永野 おい、これは確実な筋からの情報なんだが、応援団の打上げパーティが問題になってるぞ。市内全部の高校の生活指導部がさる所において、取締りのための共同対策を練ってるそうだ。警察の少年防犯係にも協力を呼びかけるってさ。

一同 （口々に騒ぐ）

川崎 （教壇に飛上る）白組の諸君、元気あるかあ。

四人 （拳を上げる）オウ。

川崎 よーし、フレーフレー白組イ。

四人 フレツフレツ、白組イ。フレツフレツ白組イ。

川崎 我々はリーダーマンシップに基づき、正々堂々と戦うことを宣言する。

四人 （呼子笛と拍手）

川崎 （大坪に気づく）あ、大坪。

四人 ………（振向く）

川崎 音楽部員は講堂に集れてよ。頼まれてうっかりする所だった。

大坪 ……うん。

大坪、クラリネットを手に教室から去る。一同、調子の抜けた顔。